㉔ おいの池の話(佐名伝)

いつのころかははっきりせんが、ずっとずっとむかしのことや。

村の百姓嘉兵衛に、おいのという気立のやさしい、きれいな娘がおったそうじゃ。はやく母親を失ってから、一家の女仕事は一手にひきうけ、からだの弱い嘉兵衛をたすけて、田畑の仕事の手助けもするちゅうしっかり者でのう、近在近郷から、嫁にほしいというてくるものも、いっぱいあったそうじやが、おいのは、まだ早い早いというて、ことわりつづけてきたそうな。

ところが、ある年のくれのゆうがたのことじゃ。おいのは、父の用事で近くの町までいってきて、とっぷりくれてかえってきたのやと。そして、村の入口にまつってある地蔵さんの前まで帰ってくると、そこにうずくまって痛がっているひとりの若い男をみつけた。近づいてみると、すみぞめの衣を着た僧で、にわかな腹痛で、苦しんどった。

そこからおいのの家は、そんなに遠くなかったので、おいのはその若い僧をせおうてうちへ帰っていった。それから父の嘉兵衛といっしょに、薬をのませてやったり、腹をおさえてやったり、いろいろと手をつくしてやったそうじ

おいのちゃん

やが、その甲斐があって、その夜おそく若い僧の病気は、うそみたいにようなってんと。

「かたじけのうございます」

と、若い僧は、眼に涙さえ浮べながらいうた。

「わたしは、南都興福寺で学問をつづけている俊海という者、いささか所要あって吉野山に立ちより、ここから高野にでようとしての道すがらの急病、おかげさまで、一命をすくっていただきました。この御恩は、生涯決して忘れません。が今は、修業の身、いつの日にか必ずおむくいいたします。」

おいのは、うすぐらいあんどんの灯のもとで、初めて若い僧のひきしまった顔をみて、生れてはじめてのはげしい恋心をもち、その晩一晩まんじりとも眠れなかったのじゃと。

あくる朝早く俊海は、いくたびも礼をのべ別れをおしんで修行の旅に出立してしもうたが、いったんおいのの心についた火は、どうにも消すことができず、いよいよ燃え立つばかりだったそうな。

その日からおいのの様子が、みんながびっくりするほどかわってしまった。あかるかった顔がくらく思いにふけり、

いつも川のほとりにあるひょうたん池のかたわらに立って、ぼんやりとしていたり、さめざめと泣いていたりしたのじゃそうな。嘉兵衛はそれがなによりも心配だったが、どないしようもない。

その年もくれて、新しい年の正月も終りに近い雪のふりしきる日、南都興福寺の猿沢池畔の坂道を、ふかいまんじゅう笠をかむったみすぼらしい若い娘が、のぼっていった。二月ばかりのうちに、狂うような恋心にすっかりやせたおいのである。娘心のひとすじに俊海を興福寺にたずねてきたわけよ。山坊を訪ねて面会を求めると、俊海はおった。命の恩人なのでよろこんで迎えてくれたが、おいのは、ここでは話もでけんからというて、五重の塔の下の人気のない雪の木かげへきてもらい、そこで燃ゆるような恋心を必死になってうちあけたのじゃと。

びっくりしたのは俊海じゃ。

「なにをおっしゃいます、おいのさん、わたしはごらんの通りの修業僧、御恩は忘れませんが、あなたのお心にはそうわけにはいきません。おゆるしください。」

といって、すがりつくおいのの手をふりほどいて寺門深くかけこんでしもうたそうな。

死をかけてのおいのの願いが、そんなふうにつめたくはね返されたので、あいかわらずふる雪の中を、よろめくように、おいのは村までかえってきたが、それから二日あとの朝、一通の遺書をのこして、ひょうたん池の青黒い水の底に沈んでいるおいのの姿がみつけだされたんじゃと。遺書には、俊海に対するひとすじの恋に命を絶つということと、先立つ不孝を心からわびてあったそうじゃ。

ところが、そんなことがあってから数日後、南都の興福寺にいた俊海が、なんの気なしに猿沢池のとこへおりてきて、ふとみると、池の面にこのあいだみたおいののまんじゅう笠が浮んでいるので、はっとおどろいたという。そらびっくりするわ。笠をひきよせてみると、笠の裏に「おいの」と書いてあるからまちがいはない。一体どうしてここにこんな笠が浮いていたのだろうかと俊海が不審に思っているとき、後からその肩をたたく者がおった。一人娘の切なる恋を、娘にかわってせめて一言だけ俊海に伝えてやりたいという親心から、はるばるやってきた嘉兵衛だった。

俊海は、その顔をみると、

「あっ、嘉兵衛さん、おいのさんは」

と、聞いた。

「はい、あなたを慕って、このあいだ村の池に身を投げて死にました。」

「えっ、それでは、この笠は？」

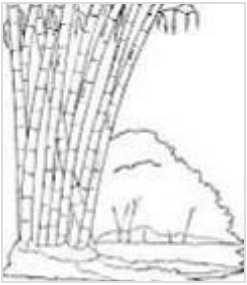
その笠をみるなり、嘉兵衛もびっくりして「あ、これは、たしかにおいのの笠、どうしてここへ」

と不思議そうにきいた。

むかしから村のひょうたん池と奈良の猿沢池とは、底の方でつづいている。そのためにひょうたん池の堤に立って、強く足をふむと、下が穴洞になっているのが、つづみをうちならすような音がしたので、村の人たちはそれを「つづみが芝」と呼んでいた。いいつたえの通り、これは地下をうねうねと空洞が通って二つの池をつないでいるものにちがいがない。身投げの折、ひょうたん池に投げこまれた笠が、恋しい俊海への情をこめて、地下を延々とくぐって猿沢池までたどりついたものにちがいないと、俊海も、嘉兵衛も思ったそうな。ひとすじの娘の恋心のいじらしさに、そのまんじゅう笠の話をきいた村の人たちは、いずれも涙を流して同情し、それからのちその池を「おいの池」と呼

ぶようになったというこっちゃ。

その池は、高い岸の上にあって、下の吉野川の水面とかなり落差があるにもかかわらず四季いつでも、水がひあがったためしもなく、ふえもせず、へりもせずに水位を保っているが、その池が、猿沢池とつづいているちゅうことは、その水位がおんなしやからだということがでけるわけじゃわな。ふしぎな池や。

なお、俊海はその後どうなったのかというと、その日から、興福寺から煙のように消え去ってしもうてんと。どこへいったのか、生きているのか、死んでしまったのか、だれも知らんというこっちゃ。今だにわからん。

それで村の人たちは、決して口には出さなかったけれど俊海もまた、おいのをみたときから、おいのの姿が心に刻みこまれていて、そのために姿を消して、きっとどこかで、おいのの後を追って死んでしまっているにちがいないといいあっておったが、もちろんほんとうのことは、なんにもわからん。